若葉ちゃんといちゃいちゃ（非エロ）

久里浜燐

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

若葉ちゃんの需要が少ないので書きました。

若葉提督です。

目次

若葉ちゃんと耳かき ―――― 1
若葉と鎮守府とハロウィーンと。 6
若葉ちゃんとクリスマス！ ―――― 11

若葉ちゃんと耳かき

「ん、仕事が終わったのか。お疲れ様だ。
……どうした、提督？若葉の顔に何かついているか？
若葉か？若葉は２４時間寝なくても大丈夫だ、気にしなくていい。
それより提督。折角だ、何かしようと思っているが……何がいい？
え、耳掃除？……なるほど、初霜が気持ちいいと言っていたのか。なるほど……。
いや、別に否定ではないぞ？ああ、少し準備をするから……そうだな、提督の寝室が隣にあったな？
ほとんど仮眠室のようなものだが……まあ、耳掃除をするには問題ない。そこで待っていてくれ」

「……ん？この袋か？耳掃除の道具だ。
たかが耳掃除に、って……耳掃除はそんなに楽なものでもないぞ？
最近だと色々なタイプの耳かきも見るし、人によってはどれが適しているか変わる場合もあるからな。

……そう、この袋の中に大抵のものは揃えている。と言ってもあくまで大抵の種類だからな？

ああ、そうだ。若葉の趣味の一つだ。……『お前にも趣味があったのか』って、それは酷くないか？若葉にだって趣味の一つや二つある。

そうか、耳掃除だったのが意外か……まあいい、それじゃあ、始めていくぞ？

それじゃあ提督、若葉の膝に頭を乗せてくれ。……別に、乗せなくてもいいが、普段と同じコンディションでできるか問題だぞ？

……そう、それでいい。それじゃあはじめていくぞ、提督……って、意外とたまっているな。

そうか、この間の特別海域攻略で、する時間がなかったのか。だが、溜めすぎると耳が聞こえなくなるぞ。

目と耳は使えないと使い物にならないからな。特に、戦場では。

……なんだその顔は？『だから耳掃除が趣味なのか』……って、別に戦闘じゃなくても耳が使いづらいのは不満だろう？

そうだ、初霜に一度言われてな。それからハマって、いつの間にか若葉が初霜にしてやるようになった。

……って、今はどうでもいいだろ？とりあえず、していくぞ。

ん？『耳かきはいいのか』って？その前に、少しマッサージをする。
耳には意外とツボがあるからな。耳を見るだけで体の不調がわかる、と言われるからな。
だから、まずはマッサージだ。最近、碌に休んでいなかっただろ？だから、まずは眼精疲労のツボだ。
丁度耳たぶの真ん中にあるから、ほら……ゆっくり、ぎゅー……っと。どうだ、気持ちいか？
そうか、眠たくなったらいつでも寝てしまって構わない。なに、指揮官としての責任は重いからな。
たまにはこういうのも許されていいはずだ……っと、続けるぞ？
次は、肩こりだな。あの書類の山を片付けたんだ、肩こりもそれ相応だろ？
ここの、耳の外側の真ん中あたりを……ぎゅーっ、と……どうだ？初霜は、目を細めて喜ぶんだがな……
っと、それじゃあ本題だな。そろそろ耳掃除を始めるぞ。
まずは……所謂一般的な耳かき、というやつだ。
始めていくぞ……って、結構溜まっているな。出来ないことはないが、さすがにもう少し頻度を高めた方がいいぞ。

そうか、それじゃあ始める……まずは入口のあたりからだな。ほら、ゆっくり入っていくのがわかるか？
ん……ほら、もう溜まっているぞ……先が、当たってるだろ？
ほら、カリカリ……って、剥がれていくのがわかるか？気持ちいいようだな、すごい表情をしている……。
気持ちいいなら、それでいいんだ。遠慮はいらない。今はただ、耳の快感を感じるといい。
そうだ、初霜も最初はこんな感じに……いや、今もこんな感じになるな。
ゆっくりと掻きだしていくぞ……ほら、つー……っと。
ふふ、それじゃあ奥もやっていくか。大丈夫だ、大船に乗ったつもりで安心しろ。
そうか……ほら、入れるから動かないでくれ……ん、ああ。多分今奥の方に触れた。
これを、ゆっくりと掻きだしていくからな？ほら、カリカリって……聞こえるか？
そうだ。少しずつ剥がしているが……これよりも、もっといいものがある。一度抜くぞ？
……ああ、これだ。このピンセットを使う。
そうだ、これで引きはがす。少しムズムズするが、我慢できるよな？
そうだ、それでいい……それじゃあ、入れていくぞ。

大丈夫だ、怖くない。若葉を信じてくれ。
今、大きいのの端を掴んだ。このまま引き抜くぞ……ほら、ぺりぺり……。
……剥がれているのが、わかるか？かなり、大きいぞ……っと、ほら、これだ。
まったく、ここまで溜めるとはな。次からはもっと頻度を上げるといい。
さて、次は仕上げだな。
最後はこの、綿棒を使う。
ああ、そうだ。これに絡ませて取るんだ。
それじゃあ、入れていくぞ……。
……提督、顔が蕩けているな。そんなに気持ちいいのか？
いや、気持ちいいのならそれでいいんだ。若葉の耳掃除がそれだけ上手いということだろう？
褒められることは、悪いことではない。ほら、続けるぞ。
ほら、がさごそ……綿棒に、細かいのが絡むのが、わかるだろう？
さて、抜くぞ……っと、いっぱいついたな。ここまで溜めるのは、滅多に見ないぞ。
ん、あぁ。そうだったな。まだ片耳だ、逆側を向いてくれ。
若葉のお腹を見つめる？別に、見られて困るような体ではない。ほら、若葉に耳掃除をさせてくれ」

若葉と鎮守府とハロウィーンと。

「トリックオアトリートだよ、司令官と秘書艦さん」
「ほら、響。第六駆に分けてやれ」
執務室に菓子をねだりに来た響に、ジャック・オ・ランタンをあしらった容器に入れた菓子を渡してやる。
「…提督、正解だったな」
「何がさ、若葉？」
僅かに嬉しそうな後ろ姿で部屋を出る響を見送った俺を、バインダーにメモを取っている若葉が感心したようなーーとはいえ、あまり表情は変わっていないがーー顔でこちらを見る。
「一つ、慰安としてハロウィンをした事」
「まぁ、息抜きは必要だからな。哨戒班の分は多く菓子をやるって言ったら、立候補も多かったし」
背後に設けられた窓をちらと見ても、その海には小粒程度にさえ哨戒の艦隊は映らない。

「二つ、隊ごと1人ずつ来させるようにしたこと」
「それは、純粋に人手が足りないからだ。明石も大淀も、偶には休んでもらいたかったしな」
本当はお前も姉妹といて良かったのだぞ、と言えばお前と一緒に1日過ごしたかったのだ、と返される。
「それに、だ。提督、タダでさえ仕事を投げ出しがちなお前が完遂する前に応援を呼びそうな事は分かっているぞ」
「…うん、否定出来ないのがとても悲しい」
僅かに鋭くなった視線が痛い。
まあとにかく、と若葉が話題を変える。
「駆逐艦は今ので最後だ。海防艦と潜水艦はもう終わっている。軽巡洋艦は…川内型がまだだな」
「川内型かぁ…那珂か神通が来ると思っていたが、その辺は聞いてる?」
いや、何も。と首を振る秘書艦を見れば、ううむと首を捻る。
「まあ、じきに来るかぁ。そこまで考えんでも」
「そうだな、いつ来ても渡せるようにしながら片付けよう」
結局、神通に昼寝から起こされた川内が夕方に執務室に顔を出して、渡された菓子を

その場で食べようとしたのを那珂が引っ張り出した以外は何事も無かった。
「くあぁ…今何時だ？」
「フタサンフタハチだ、提督」
哨戒以外の出撃は全て無しにしたとはいえ、本来の書類仕事まで休みにしたら業務が滞るわけで。
ハロウィンのイベントをやると決めた先週から今日の仕事をある程度割り振った秘書官に頭は上がらないが、それ以上に一日の疲れが身体に重く響く。
「今日一日お疲れ様、だ。提督」
「おー…」
書類を退かした机に突っ伏せば、若葉の労いに重い右手を挙げて答える。
「そうだ、提督」
「んぁ、何だ？」
呼ばれて振り向けば、油性ペンを持った秘書艦さんが立っていた。
「トリックオア、トリート。だぞ」
参ったな、こいつは今日を丸一日楽しみたかったか。
だが、残念だったな。
「ほらよ、若葉」

机の引き出しに置いていた飴を一個渡せば、変化の少ない顔を不満げにさせながらも受け取る。
「いつものではないか、悪戯がしたかったぞ」
「じゃあ、そのいつもの間宮さんとこの飴はいらないな？」
「それとこれとは別だ」
包みを開けて口に頬り込んだ若葉は、一舐めしてキラキラと嬉しそうな表情を浮かべる。
「悪くない」
「また、買い足しといてやるからな」
ああ、と尻尾があればぶんぶんと振っていそうな彼女の頭を撫でてやったところで、気が付く。
「…そういえば若葉、風呂と飯は？」
「大丈夫だ。」
「はぁ…風呂は俺の部屋のを使って来い」
「了解した」
そう頷いて秘書艦は執務室を出る
さて、と書類を片づければ俺も追って自分と若葉の生活空間に戻るのだった。

「ふたさんごーろく、風呂はどうだった？若葉」
「柚子の香りの入浴剤か？悪くなかった」
そうかそうか、と濡れた髪を乾いたタオルで撫でてやる。
嬉しそうに目を細めたときにだけ、口角が上がる自然な笑顔を見せるのは、俺と初春型の秘密だろうな。
「なあ、若葉？」
「なんだ、提督？」
髪を拭くのを一度止めれば、きょとんとした顔でこちらを向く。
「トリックオア、トリート。だな」
「え、えっと…だな」
一瞬狼狽する若葉だが、次にはがっしりと俺の両頬を抑える。
そして、有無を言わさぬままに額へのキス。
「…トリート、だぞ」
僅かに頬を赤らめる若葉が、たまらなく愛おしかった。

若葉ちゃんとクリスマス！

「メリークリスマスだぞ、提督。」

深夜の執務室。書類のめくられる音とペンの音が響くほどに静寂に包まれたその部屋は、突然の来訪者によってその静寂は破られた。

「おー、若葉か」

執務室にノックもなく入ってきたのは、この鎮守府最高練度かつ秘書艦でもある初春型三番艦の艦娘、若葉。

だがその制服はいつもの濃紺のブレザーではなく、サンタクロースのそれを性別と体格を合わせたような格好で。

「今夜、頑張っている提督に、全員からのクリスマスプレゼントだぞ。」

「あーうん、ありがと?」

机上に溜まった書類は、艦娘たちとのクリスマスパーティーをやる為の準備が優先されたせいで後回しにされた書類たちなのだ。

だから自業自得と言えば自業自得なので、それを知っている若葉から労われると同にも気まずさを覚えてふっと目を逸らしてしまう。

「その、何だ。提督は書類…というか、仕事を後回しにする癖があるが、それはすべて若葉たちの為だろう?」
「まあ、そうね?」
この間のハロウィンも、その前の夏祭りも、一部の哨戒艦隊を残して全員が楽しめるようにしたし、その哨戒組も出撃する前後に楽しめるようにはした。
「結構、皆感謝しているのだぞ。提督」
だからほら、と渡されたのは一冊のアルバム。
中を見れば、着任してそれなりに余裕が出てきた時のころからの写真で満たされていた。
友軍泊地が教習を受けたときの支援や、近海を遊弋していた敵主力艦隊を撃破した時の皆の満足感溢れる顔や、砲煙爆炎をバックに映る艦娘、あるいは鎮守府で何気なく過ごしていたであろう時に唐突に撮られ慌てている艦娘。
そして、最後のページ。
どんな写真があるのかと捲れば、そこはただ真っ白なページだった。
「なあ、提督」
アルバムに集中していたからか、あるいは無意識のうちに許していたか、隣に来ていた若葉が声をかける。

「このアルバム、気付いたことはないか？」
「気付いたこと…？」
懐かしいなと思ってみていたが、若葉の質問への回答は浮かばない。
「ひとり、どんなに探しても写真に顔が写っていない奴が居たんだ」
はて、うちの艦娘にそんな奴が居ただろうか。
引っ込み思案だったり恥ずかしがり屋だったりとしても、姉妹艦といる時は油断しているのか写真に撮られるのは許容してくれるのはうれしいですと青葉が言っていたのは覚えている。
だから、そんな艦娘に心当たりがなかった。
「…その一人って、誰なんだ？」
「顔を上げてみれば、わかるぞ。」
部屋に誰か来ているのだろうか、そう思って顔を上げる。
次に目に映ったのは、屋根裏から上半身を出してインスタントカメラを構える川内。
カシャリ、と小気味良いシャッター音を鳴らして焚かれるフラッシュには抵抗できなかった。
「あははっ…いい顔してるじゃん、提督」
いつもの制服のマフラーの代わりにサンタっぽいマントを羽織った川内は部屋に飛

び降りながら印刷された写真を現像して見せる。
「よしっ、それじゃあもう一枚撮るけどいいよね?」
写真の出来を若葉と見せ合う川内が、そう尋ねてきた。
「ああ、同じものをもう一冊作っているからな。こっちは皆が見れるように、だぞ。」
そう補足する若葉の隣で手のひらに乗るようなデジカメを構える川内がにいっと笑う。
「だからさ、二人並んでよっ?」
「…まあ、若葉と一緒なら」
川内の提案を若葉は事前に聞かされてなかったのか、驚いた表情を浮かべる若葉。
翌日、もう一冊のアルバムにはぎこちない笑みを浮かべるこの鎮守府のトップ二人組の写真が貼られて笑われるのは別の話。